

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかほとんど見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というもののはじまりであろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉缶だ。その後猫にもだいたいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙を吹く。どうも咽せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速度で運転し始めた。書生

が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つてみると、どざりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、そのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考へ付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入つたら、どうにか

なると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れてい
なかつたなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れん
のである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴
は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路
になっている。さて邸へは忍び込んだもののこれから先
どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減
る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末でもう一刻
の猶予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明る
くて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考える
とその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで
吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇し
たのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前
の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸
筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つ
たから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじ
いのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再び
おさんの隙を見て台所へ這い上つた。すると間もなくま
た投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い
上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返した
のを記憶している。その時におさんと云う者はつくづく

いやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこの返報を
してやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後に
つまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々し
い何だといひながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて
主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出
しても御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の
下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておつ
たが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまま奥へ
這入つてしまつた。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。
下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして
吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたので
ある。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業
は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入つたぎ
りほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家
だと思つている。当人も勉強家であるかのごとく見せて
いる。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家では
ない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼
はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本
の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色
を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。そ

の癖に大飯を食う。大飯を食った後でタカジヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であった。どこへ行っても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのである。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかつたからやむを得ないのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い昼は椽側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入つてこのうちの小供の寢床へも

ぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだつてなどは物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等は我儘なものだと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同衾する小供のごときに至つては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へっついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を磨いたら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が頼えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言つて

おらるる。白君は先日玉のような子猫を四足産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持って行って四足ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦ってこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつもの議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解していないといって大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鯨の臍でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなつてゐる。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪つてすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。